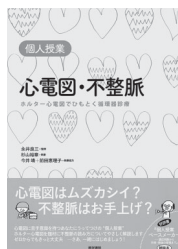


書評

[評者]
村川裕二
帝京大学附属溝口病院教授・
第四内科



個人授業 心電図・不整脈
ホルター心電図でひもとく循環器診療
永井良三 監修
杉山裕章 執筆
今井 靖, 前田恵理子 執筆協力

B5判 頁344 2011年
定価4,200円(本体4,000円+税5%)
[ISBN978-4-260-01335-2]医学書院刊

つまらない本の書評を書くときは、披露宴で「人並みでもない新郎」を秀才と褒めるのと同じ努力を求められる。本書のかわいい表紙を眺めて、そんなことを思った。ベテラン医師が新米医師とやりとりして何かを学ぶ、よくあるタイプの本だ。

ところが、二人の「ボケと突っ込み」は肩の力が抜けて、引き込む魅力がある。「なるほど、なるほど」などと相づちを繰り返すところなど笑える。書評を書くだけならパラパラめくれば話は済むだろうに、うっかり最初から最後まで読んでしまった。ムム、お見せしました。以下にそのワケを述べる。

その1：今どきはやらぬ「ホルター心電図」という言葉を書名に入れて読者を油断させている。「ジミで退屈な雰囲気」を装いながら、トリックがある。副題の「ホルター心電図でひもとく循環器診療」が答えなのだが、ホルター心電図にこだわらず、何でもかんでも行き当たりばったりで、料理しまくっている。「思いつくまま書きました」という雰囲気が楽しい。

CARTO システムで描いたカラフルな三次元マッピングは、ホルター心電図のテキストにはたぶん初参入。さらに、トライアルのグラフ、カテーテル・アブレーションのときの透視像、肺静脈の病理とくれば欲張りにもほどがある。ともあれ、心電図そのものを勉強してもしょうがない。心電図は最初に開くドアだが、ドアの勉強ばかりではつまらない。それはシステムに任せるべきだ。心電図波形に閉じ込まないところが魅

力の1.

その2：AVRTとAVNRTの判別について、心拍数から“アタリをつける”といった表現は面白い。ホルター心電図と運動負荷試験の“虚血性心疾患検出の感度、特異度の比較”も興味深い。基本的な臨床情報を小難しいこと抜きでスッとまとめている。そろそろ終わりかと思えば、ゲノム解析の意義にまで手を広げている。遺伝子多型の話をワルファリンの効果の個体差と関連付けているところまで読んで、「いったい何の本?」と思ってしまった。どういう情報が面白いのか、ネタの選び方が魅力の2.

その3：自分の頭でメッセージを考えている。自分の頭で考えることをやめて、ひたすら文献で武装した本が多い。ワクワクしないし、人間くさくなくて、寂しい。本書は誰も参考にする事のない文献を300個並べるなどというやばなことはしていない。自分で考えて、自分でしゃべっている。ホルター心電図のレポートをどう書くか、どこまで書くか、初学者が引っかかるさまつなことまで、親切に教えてくれる。著者はしつこくも親切な性格なのだろうか。面倒見がよくて、後輩に教えるのが嫌いではないのだろう。かくして、懇切、親切が魅力の3.

まとめ：天衣無縫に好きなことを書きまくったら、フトコロの深い本が出来上がった。外見と語り口はやさしくしてあるが、見た目より読者を選ぶ。他のホルター心電図の本が色あせて見える名著。